

【旧約聖書日課】申命記 18章15～22節

¹⁵あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない。¹⁶このことはすべて、あなたがホレブで、集会の日に、「二度とわたしの神、主の声を聞き、この大いなる火を見て、死ぬことのないようにしてください」とあなたの神、主に求めたことによっている。¹⁷主はそのときわたしに言われた。「彼らの言うことはもっともである。¹⁸わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。¹⁹彼がわたしの名によってわたしの言葉を語るのに、聞き従わない者があるならば、わたしはその責任を追及する。²⁰ただし、その預言者がわたしの命じていないことを、勝手にわたしの名によって語り、あるいは、他の神々の名によって語るならば、その預言者は死なねばならない。」²¹あなたは心の中で、「どうして我々は、その言葉が主の語られた言葉ではないということを知りうるだろうか」と言うであろう。²²その預言者が主の御名によって語っても、そのことが起こらず、実現しなければ、それは主が語られたものではない。預言者が勝手に語ったのであるから、恐れることはない。

【福音書日課】マタイによる福音書 5章38～48節

³⁸「あなたがたも聞いており、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。³⁹しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。⁴⁰あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。⁴¹だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。⁴²求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」

⁴³「あなたがたも聞いており、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。⁴⁴しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。⁴⁵あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。⁴⁶自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるだろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。⁴⁷自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるだろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。⁴⁸だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

「天の父の子となる」

皆さんの前に大風呂敷を広げて、鳴り物入りで準備をしてきた「オープンチャーチ」は、いよいよ来週です。教会の一日をオープンにして、開放して、普段ここにおいでになることが無い方にも気軽にお越しにいただきたい。日曜日の教会の一日をご覧いただき、ここに集っているキリスト者の姿に触れていただきたい。そう願って、皆さんにも心備えをお願いしてきました。

ご奉仕をしてくださる皆さんの心配は、いったい当日、何人くらいの人たちが来てくれるのだろうか、ということです。教会員の皆さんの他に、どれだけの方がおいでいただけるのか。一応の目標はあります。けれども、食事やプレゼントの準備をしてくださる皆さんが心配されるのは、実際にどうなるのか、ということでしょう。当日の人数が、あまりに少なくとも、逆にあまりに多くても、準備をしてくださる立場からすれば、困ってしまう。もちろん、たとえ食事やプレゼントが足りなくなったとしても、おいでくださる方が多すぎて困るということはないのです。目標は、皆さんがそれぞれに一人、お連れくださることです。ご家族か、友人か、あるいは当日、教会の前をたまたま歩いている人か、だれでもよい。ぜひ、一人が一人を、お誘いいたしましょう。

そうは言っても、どなたのこともお誘いできないという方も、中にはいらっしゃるでしょう。でも、そのような皆さんにも、大切な役割があります。どなたかがお連れくださった方を、会堂でお待ちし、お迎えする役割です。とは言え、何も皆さんに接待役を期待してはなりません。慣れない給仕をしていただくとも思わない。ただ、ここで、キリスト者としての姿を、お見せいただきたいのです。お互いの関係の中で、初めての方を迎える中で、皆さんが、キリスト者として振る舞う姿を、自然にお見せいただきたいのです。

「そんなことを言われても、自分の姿を見られたのでは、初めての方に躓きを与えてしまうかもしれない」などとお考えになる方もあるかもしれません。でも、皆さんの多くは、洗礼をお受けになられました。「神の子」と呼ばれるようにされて、今日まで歩んでこられました。皆さんは、御子キリストと結ばれて、「神の子」として生きるようにされてきた一人ひとりです。その皆さんが、「神の子」としての姿を見せられないわけがあるのでしょうか。

主イエスは、今日の福音書日課の中で、「あなたがたは、**あなたがたの天の父の子となるべきなのだ**」とおっしゃられています。それは、いつか、できたら、そうなりなさい、という淡い期待ではありません。今、あなたが、主の御言葉を聞く者として生きようとするのなら、今、そうなるべきだ、というのです。昔、まだ青年時代、教会の人間関係で悩んでいたとき、「人ではなく、神を見なさい」と助言してくださった方がありました。そうするのが必要なときもあるでしょう。けれども、「わたしを見ないでください」と言ってはいけない。なぜなら、神がわたしたちを御子のゆえに「子」としてくださったからです。

「教会に連なる《神の子》として人々の前に立ちなさい」。洗礼にあずかったとき、わたしたち一人ひとは、聖霊によって、そう命じられた者なのです。

「完全な者となりなさい」

もちろん、わたしたちは、最初から《神の子》として模範的な姿を身に着けていたわけではありません。今でも、だれが見ても《神の子》と言えるような振る舞いをしていないわけではないのです。神の御ひとり子である主イエス・キリストのお姿やその振る舞いに、わたしたちは、聖書を通して触れるのです。そして、そのたびに、わたしたちは、自分に幻滅するのです。いくら「あなたたちは神の子だ」と教えられていても、いざ自分の姿を振り返り、自分のしてきた振る舞いを思い起こすならば、主イエスとのあまりの違いに、わたしたちは、自己嫌悪に陥らないではいられない。だから、その自己嫌悪を隠したくて、わたしたちは、「わたしを見ないで、主イエスを見てください」と言ってしまうのです。

そういった自己嫌悪が、まったく悪いことだとは思いません。少しぐらい自己嫌悪するところがわたしたちの中に残っていないと、わたしたちは、傲慢で自己中心的な本質がある者ですから、自己採点して、「満点ではないかもしれないけれども、どうか合格点は取れている」と思いこむようになるかもしれない。いつのまにか、自分を《他の人よりもマシな神の子》として誇るようになってしまいかもしれない。

おかしな言い方かもしれませんが、主イエスは、今日の福音書で、わたしたちがいつもどこかで自己嫌悪を抱かざるを得ないような教え方をなさっているのです。あえて、わたしたちが自己嫌悪を抱くようになさっているのかもしれない。

当時のユダヤ人にとって、「**目には目を、歯には歯を**」という律法の教えは、それを守れていれば周囲から尊敬されるというような、立派な倫理規範だったのです。今でも、そうかもしれません。わたしたちは、やられたら、やり返す。同じだけ、よりは少し多めに。場合によっては、倍にして。実際にそうしないとしても、わたしたちの本心には、そういう思いがいつでも湧いてきます。そういう人間の本質から考えれば、「目には目を」と、やられた以上の報復をしない行動は、十分に立派な行動だと言える。

けれども、主イエスは、それでは不十分だとお教えになられたのです。「わたしは言うておく。悪人に手向かってはいけない。…求める者には与えなさい。…」。

さらにたたみかけて、主イエスはおっしゃられた、「**隣人を愛し、敵を憎め**」という行動規範で十分だと考えていた者に対して。「わたしは言うておく。**敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。**」

それはすべて、わたしたちが「**天の父の子となるため**」なのです。天の父が**完全であられるように**、わたしたちも**完全な者**となるためだ、というのです。

何とも、途方もない目標です。神のようになる、というのです。そんな畏れ多いことを、わたしたちは求めてよいのでしょうか。よいのです。主が「完全」と言われるのは、「成熟」という意味です。我が子が親の心を知り、親を目標として成熟することを親が願うように、わたしたちが天の父の子として御父の御心を知り、御父のように振る舞う者へと成熟することを、御父は願ってくださっている。だから、あなたがたもそう願いなさいと、主イエスはお教えくださっている。

まずは「挨拶」から

「あなたがたも**完全な者になりなさい**」とは、何と希望に満ちた教えでしょうか。わたしたちが、傲慢な思いで、そう願っているのではないのです。主の教えを聞き、神の御心を知り、御父がいかにわたしたち人間に対して振る舞ってくださっているのかを知れば知るほど、わたしたちは、同じようにできない自分に対して、自信を無くし、自己嫌悪に陥るばかりです。そのわたしたちに、主は、「あなたたちも、御父の御心を知って、御父のように完全な、成熟した神の子になるのだよ。あなたたちは、そうなることができるのだよ」と、約束してくださっているのです。

皆さんは、主のお命じになられたことを、どこまでできるとお考えでしょうか。

主は、「**悪人に手向かってはならない**」と命じられました。そうです。わたしの右の頬を打とうとする者に、わたしは左の頬をも向けるべきです。わたしを訴えて下着を取ろうとする者に、わたしは上着も取らせるべきです。だれかがわたしと一緒に行くように強いるならば、わたしはその人が求める倍でも一緒に行くべきです。主は、「**求める者には与えなさい**」と命じられたのです。わたしから何かを借り受けようとする者には、気前よく貸すべきです。

できません。わたしにはできません。一度はできても、二度はできません。二度はできても、三度はできません。

それでも、主はお命じになられるのです。「**敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい**」。そうです。わたしは、自分を愛してくれる人を愛することで、満足すべきではないのです。わたしは、自分を愛してくれる見込みのない人を愛すべきです。

できません。わたしにはできません。わたしが愛するのは、きっと自分を愛してくれると期待する人ばかりです。今は愛してくれていなくても、いつかは愛してくれると期待できる人ばかりです。そのような期待なしに、わたしは、だれのことも愛することはできません。

そうです。わたしたちは、そう言って、弁解を続けるかもしれない。

そういうわたしたちの態度を、主イエスは、すでに見越していらっしゃったのではないかと、わたしは思います。だから、主イエスが最後に挙げられたご命令は、「挨拶」でした。小さなことです。けれども、人と人との関係の入口です。「だれに対しても、それが敵であっても、あなたはその人に向かって挨拶をしなさい」。

「そこから始めてみなさい」と主は仰せなのです。それが、敵を愛し、迫害する者のために祈り、求める者に与え、悪人とさえ共に行く者となるための第一歩。天の父の子となり、御父のように成熟した神の子となるための、第一歩。それさえせずに自己嫌悪に閉じこもっている理由など、どこにもないのです。

御父は、わたしたちに御顔を向けて挨拶してくださっています。その御顔に向き合うことを許されたわたしたちの顔は、御顔に似た顔とされ始めているのです。神の子とされた者の顔です。「さあ、その顔をもって行きなさい、わたしが出会わせる人のもとに。わたしは、あなたを遣わす」と、主がお命じなのです。